

西岡常一の「木」の哲学について

豊田千代子

はじめに

科学技術の進歩により、今日、わたしたちのくらしは、便利で快適なものになってきた。しかし、利便性や経済効率を追求し続ける社会の中で、わたしたちは、人（自分や他者）や自然とじっくりと向き合うくらし方を次第に失ってきているように思われる。また、こうした生き方の根本にある人や自然の「いのち」を感じとる感性をも失いつつあるように感じられる。

便利さ、早さ、効率を価値とする社会の中で、わたしたちは、お金と引き換えに望む商品をできるだけ早く入手しようとする消費者としての生き方を身につけてきている。自分自身でものを生産するという、時間を要するくらしのスタイルは、現在、特に都市部においては、ほとんど切り捨てられてしまっている。また、仕事の面では、目標に向けて時間に追われつつ忙しく生きるというスタイルを身につけてきている。いかに早く目標を達成するかという点に重きがおかれ、そのため、立ち止まってものごとをゆっくりと考えることの重要性は過少評価されている。

このような生産と切り離された消費者としてのくらし、時間に追われる仕事中心のくらしの中で、わたしたちは、人や自然とゆったりと向き合い、それらの「いのち」を感じとっていく感性が萎えてしまっているように思われる。そして、その結果、一人ひとりのものの感じ方や、一人ひとりにとって

心地よいと感じられる時間の感覚や流れを大事にしながら生きていくことや、人と自然との調和をめざして生きてくことが困難になってきている。本来誰もがもっている、人や自然の「いのち」を感じるとる感性を回復させ、人や自然との関係を豊かにしながら、心地よいくらしを紡ぎ出していくことが、現在、強く求められているのではないだろうか。

本稿では、このような現代の状況を踏まえながら、自然と対話しつつ生きた宮大工、西岡常一（1908～1995）の生き方を、「木」との関わりを中心に検討したい。

西岡は、宮大工として生涯、木と向き合い、古代建築の解体修理や再建を行ってきたが、その仕事に貫かれていたのは、木のいのちを生かすという姿勢であった。また、西岡は、一人の弟子を育てたが、それは木と同様、弟子のいのちと向き合って生かしていくという営みであったのである。

以下では、西岡の生涯について簡単に述べた後、西岡の生き方に大きな影響を及ぼしてきた「木」を主題とし、「木」のとらえ方や、宮大工の技術の習得の仕方などをみていきたい。そして最後に、それらの現代的意義について考察したい。

1. 西岡常一の生涯

(1) 宮大工棟梁のための修行

西岡常一は、1908(明治41)年、代々法隆寺に仕える大工の家庭に生まれた。西岡家は先祖代々、法隆寺の建物の修理や解体に携わる宮大工で、祖父の代から、その棟梁を務めてきた。祖父(常吉)、父(楢光)に続き、常一も三代目の棟梁として仕事をするようになった(西岡、2005、9)。

幼少時より、西岡は、祖父のもとで棟梁としての教育を受けてきた。祖父に連れられて法隆寺の仕事場に行き、大工たちの働きぶりを見て育ったのである(15)。

小学校(斑鳩尋常高等小学校)入学後も、夏休みには仕事場に連れて行かれ、三年生くらいになると柱石をすえる穴を掘ったり、掘った土を運んだり、

少しずつ仕事を手伝うようになった（15）。

卒業後は、「祖父の強い主張」に従って、農学校（生駒農学校）に進学した。その主張は、「人間も木も草も、みんな土から育つんや。宮大工はまず土のことを学んで、土をよく知らんといかん。土を知ってはじめて、そこから育った木のことがわかるのや」という信念にもとづくものであった。西岡は、農学校で三年間学び、そこでの実習をとおして「土の命」を知ることになったのである（16-19）。

また、農学校時代から、鑿^{のみ}、鉋^{かん}、鋸^{のこぎり}など、一通りの道具を祖父から与えられた。修業の初めは「研ぎ」であったが、祖父はやり方を教えず、「わしはこう研いだ。こういうふうに研げるまでやってみよ」とやってみせるだけであった（21）。

農学校を卒業すると、西岡は、祖父から、農学校で学んだことを実際にやってみようにと、一年間、農業を行うことを命じられた。そこで西岡は、本で勉強しながら米作りをしたが、収穫量は少なかった。祖父は、その理由を、「稲を作りながら、稲と話し合いをせずに、本と話し合いをしていた」からだと言った。合わせて、「木と話し合いができなったら、本当の大工にはなれんぞ」と戒めた（21-23）。

こうした修業を経て、1925（大正14）年のある日、食膳に赤飯と鯛が並べられ、「大工の道に入る、ささやかな入門式」が行われ、本格的な大工修業が開始されることになった（23）。

祖父からは行儀作法を厳しくしつけられた。また、夜には、祖父のあんまをしながら、祖父の語る木や土や大工などの話をとおして、棟梁として必要なことを聞き覚えていった。大工の仕事に関しては、「手取り足取りの指導」はなされず、「体で覚える」、つまり「優れた仕事を見て、それを盗む」ことが基本とされた。さらに、棟梁教育の一環として、母からは、掃除、洗濯、茶碗洗い、子守をさせられた（24-28）。

こうして、西岡は、1928（昭和3）年に営繕大工として認められ、一本立ちとなった。そして後に、祖父から、法隆寺の棟梁に代々受け継がれてきた

「家訓」(口伝)を伝えられた。その中には、「堂塔の建立には木を買わず山を買え」、「堂塔の木組みは木の癖組み」のような、木に関するものが含まれていた。この口伝が、祖父の西岡への最後の教えであったという(29-31)。

(2) 仕事と弟子の教育

営繕大工として認められた西岡は、以後、数々の古代建築の解体修理や再建などの仕事に携わるようになった。法隆寺の解体修理、法輪寺三重塔の再建、薬師寺金堂の復興や西塔の再建などである。

法隆寺では、1934(昭和9)年より20年間にわたる創建以来初めての解体修理が行われ、西岡は、途中、軍隊への入隊による中断はあったが、父とともにこの修理に携わった。1934年には東院礼堂の解体修理が開始され、このとき、西岡は初めて棟梁となった(43-44)。その後、西院大講堂、東院絵殿・舍利殿・伝法堂、五重塔、金堂の解体修理を行った(258-259)。法隆寺におけるこの「昭和大修理」は、後に西岡が「法隆寺は私の先生でもある」と述べているように、その後の西岡の仕事の基礎を築くものであった(31)。

法輪寺では、1967(昭和42)年に開始された三重塔の再建工事に携わった。そして、この年、内弟子を迎え、寝食をともにしながら育てていくこととなった(96)。

1970(昭和45)年には薬師寺金堂の復興の依頼を受け、法輪寺三重塔の再建作業と並行して携わるようになった(101)。西岡は、このとき、「木は山で買え」の教えに従い、使用する檜を選ぶために台湾の山に出かけている(104)。金堂の完成後は、西塔の再建を行ったり、伽藍全体の復興に向けて中門や玄奘三蔵院の建立を手がけてきた(118)。

このように西岡は多くの仕事を行ってきたが、その過程では、室町時代に姿を消した大工道具の檜やりがんな鉋を復元している(西岡、1993、64)。また、学者と何度も論争している。それは、実際に木を扱いた木のことを熟知している西岡、木と向き合っている仕事をする中で培われた大工の勘をもつ西岡と、現場の大工の経験よりも「学問」を重視する学者との、木の強さなどをめぐる論争

であった（69-75）。

こうして、幼少時より祖父のもとで宮大工棟梁としての教育を受けてきた西岡は、代々受け継いできた田畑を手放したりしながらも、伝授された「口伝」を生涯守りぬき、また一人の内弟子も育てたのである。

2. 西岡の「木」の哲学

大工が仕事で扱うのは「木」である。その「木」とは、西岡たち宮大工にとっては檜を意味する。法隆寺も薬師寺も、檜で造られているのである（21）。以下では、木についての西岡のとらえ方や、木に関することがらについての西岡の見解などを、西岡の「木」の哲学としてとらえ述べてみたい。

(1) 「木のいのち」を生かす

①木は生きものである

西岡は、木を扱う宮大工の仕事を、祖父や祖父から受け継いだ法隆寺の大工に伝わる「口伝」をとおして学んできた。また、自分が携わった法隆寺の解体修理をとおして、実際に学んできた。その中心となるのは、「木のいのち」を生かすという考え方や、生かすための知恵や技であったと考えられる。

この「木のいのち」について、西岡は、「木の命としての樹齢」と「木が用材として生かされてからの耐用年数」との二つがあると言っている。立ち木としての檜の寿命は二千五百年から三千年と長い、用材としての命も長いと述べている（26）。

西岡によれば、部分的な修理は行われたものの、法隆寺の五重塔や金堂は、昭和の時代に解体修理がなされるまで千三百年も持っている。しかも、五重塔の軒は天に向かい一直線になっており、建物の姿に乱れない。さらに、千年を過ぎたこれらの材木は生きており、塔の瓦をはずして下の土を除くと次第に屋根の反りが戻ってくるし、鉋をかければ檜の香りがするという。用材となった後も保たれている「檜の命の長さ」を実感させる話である（26-27）。

このような長い耐用年数を持っている檜について、西岡は、その「寿命をまっとうするだけ生かすのが大工の役目」であると考えている。樹齢千年の木であれば、少なくとも千年は生きようするために、木をよく知り、使い方を知らなければならないと考えているのである。また、そのように木を生かして使うことを、「自然に対する人間の当然の義務」ととらえているのである(27)。

こうした西岡の木のとらえ方の根底には、木を「物」ではなく、いのちをもった「生きもの」とみる見方が存在する。次の文章には、そのような西岡の木のとらえ方がよく示されている。

「木は大自然が生み育てた命ですがな。木は物やありません。生きものです。人間もまた生きものですか。木も人も自然の分身ですがな。この物いわぬ木とよう話し合って、命ある建物に変えてやるのが大工の仕事ですわ」
(27-28)

このように、木も人も自然の分身であり「生きもの」ととらえている西岡は、「木の命と人間の命の合作が本当の建築」であると考えているのである(28)。

②木の癖を生かす

「木」を「生きもの」ととらえる西岡にとって、仕事の仕方についての基本的な考え方は、木のいのちを生かすということである。そして、この木のいのちを生かすということを、木の癖や性質を生かし、耐用年数まで木を長持ちさせることととらえている。このような木のとらえ方は、前にも述べたように、祖父から伝授された「口伝」と法隆寺の解体修理とをとおして獲得したものである。

法隆寺の解体の際に、屋根瓦をはずすと、それまで負荷がかかっていた垂木がはねかえっていったが、そのような体験から、大工の間では樹齢千年の木は堂塔として千年は持つと言われている。しかし、檜であればみな千年持つというわけではなく、千年持たせるには木を見る目がなければならないと

西岡は考えている。つまり、「木を殺さず、木のクセや性質をいかして、それを組み合わせて初めて長生きする」のである（西岡、1988、12-13）。木のいのちを生かすということは、木の元来もっているいのちを生かすように木を生かしていくことであり、それは、木の癖や性質を生かしていくということなのである。

木の癖や性質を生かすということは、「口伝」でも伝えられてきた。「口伝」の中には、「堂塔建立の用材は木を買わず山を買え」、「木は生育の方位のままに使い」、「堂塔の木組みは木の癖で組め」といった「木の使い方の心構えを説いたもの」がみられるのである（西岡、1993、52）。

この「堂塔建立の用材は木を買わず山を買え」の意味であるが、西岡によれば、木の質は土の質によって決まるし、木の癖は山の環境によって生まれるため、「自分で山に行って地質を見、環境による木の癖を見抜いて買いなさい」ということと、「一つの山で生えた木を持って一つの塔を造れ」ということである（148-149）。

「木は生育の方位のままに使い」ということは、山ごと買った木をどう生かすかということであらわしたものであり、山の南に生えていた木は塔を建てるときに南側に使いというように、育った木の方位のままに使いということである。これに従うと、南に育った木には枝があるため節がたくさんでき、そのため、南の柱に節の多いものが並ぶことになるという（150）。

また、「堂塔の木組みは木の癖で組め」とは、建物を組み上げるのに寸法は欠かせないものであるが、それ以上に木の癖を組むことが大切であることをあらわしている（西岡は、この口伝に「寸法で組まず」を加えることもある）（152）。この木の癖について、西岡は、木の癖は環境によって生まれるものであり、「いつも同じ方向から風が吹く所にはえている木は、その風に対抗するように働く力」が生じており、それを「木の癖」と呼んでいるのだが、口伝は、その「癖を上手に組め」ということを示したものであると述べている。「右ねじれと左ねじれを組み合わせれば、部材同士が組み合わせさって動か」ないわけであり、「右ねじれと右ねじれを組んだら、ぎゅーっと塔

が回っていく」ということであるという（西岡、1988、228-229）。

こうした「木の癖」を、西岡は、「木の心」ととらえている。「風をよけて、こっちへねじろうとしているのが、神経はないけど、心があるということですな」と述べるのである（13）。また、木の癖を生かして使うことを、大工の勤めにとらえている。西岡は、木の癖組みを忘れた建築は建物としての力が弱く、すぐに癖が出てゆがみを生じ、木の耐用年数の半分も持たないと述べるとともに、「大工は木の性質、癖を生かして耐用年数一杯は持たせな自然の命の無駄使いですわ。まして癖があるからというて、その木をはじいて使わんというのは、もってのほかでんな。人間と同じです。癖は生かして使うてやるのが勤めですわ」と述べている（西岡、1993、153）。

木のいのちを生かすという基本姿勢は、西岡の仕事の随所にみられるが、薬師寺金堂の復興においても、口伝に従い、西岡は、檜を選ぶために台湾の山に出かけている。また、法隆寺、法輪寺、薬師寺の解体修理や再建の仕事を手がける中では、木を知る大工の立場から多くの発言をしている。たとえば法輪寺三重塔の再建時には、木の補強のために鉄材を使うことを主張する学者に反対し、木だけを使うことを主張した。「鉄材は木の命を縮める」と考えたからである。「木だけなら千年もつものを、鉄を使って八百年、五百年に減ずることはないではないか」という西岡の主張には、木の性質を熟知した西岡の、檜のいのちを守り生かしたいという姿勢をみることができるであろう（西岡、2005、101）。また、この論争において、「鉄のボルトを通すためにヒノキに穴をあける」という考え方を西岡は頑として聞き入れず、「そんなことをしたらヒノキが泣きよります」と発言したという（127）。そこには、木も人間も同じいのちをもつ生きものとみなす西岡の「木」のとらえ方をみることができる。

(2) 「木のいのち」を生かす技能

①大工の技術は「教えようがない」

西岡は、これまでみてきたように、木のいのちを生かすことを大事に考え、

それを大工の役目ととらえてきた。そして、このような考え方にもとづいて仕事を行ってきたが、そのような西岡にとって、木を扱い堂や塔を建築する宮大工の技術とは、木のいのちを生かすことを前提としたものであった。

西岡は、こうした大工の技術について、「簡単に口や本では教えようがない」と考えている。自分で実際にやってみなければわからないし、木についても、実際に触ったり、匂いをかいでみなければわからないととらえているのである（西岡、1993、33）。

西岡は、木の性格に関して、「木がコンクリートや鉄のようにみんな同じものとして勘定できたり、縮んだりせずに強度や耐用年数が均一に計算できたらいいんですが、そうはいきません」と述べている。そして、このような性格をもつ木のことを知るためには、「木に触ったり、いじったり、匂いをかいだりして一本ずつ違うことや、それぞれまるで癖があって使い方が違うということ」を知らなければならず、時間がかかると考えている（33）。またそれゆえ、木の強さや癖を見抜く技術は、人に教わって覚えられるものではないと西岡は考えているのである（西岡、1988、198）。

また、西岡は、薬師寺の金堂の柱を作るのに、自らが台湾で選定してきた樹齢二千年の檜を使ったが、その木はすばらしかったという。「金堂の仕事をやっても、これなら大丈夫やという気がしましたもんな。第一、触り心地が違いますし、木の力というものを感じますわ」とふり返っている。そして、「こういう木の感触は言葉では伝えようがありませんな。実際に見て、触って、感じて覚えていかなりません」と述べた後、「技術というものは腕だけやなくて培われた勘や感覚に支えられているんですやろな」と付け加えている（西岡、1993、35）。

このように、西岡は、大工の技術は口や本（言葉や文字）では伝えられないものであり、技術の習得をめざす者が、一本一本異なる木の感触を感じわけられるように自らの感覚を磨いていくなど、体験の積み重ねをとおして獲得していく以外にないと考えたのである。大工の技術は、「これなら大丈夫や」と西岡が感じたような感覚、さらには勘といったようなものによって支

えられているのである。

さらに、西岡は、弟子の育て方について語る中で、大工の技術を学ばせる方法やその意味について述べている。寝食をともにする徒弟関係の中で、弟子に見本を示して学ばせるとともに、現場での仕事の体験をとおして学ばせるといった方法とその意味について述べているのである。

西岡は、棟梁が弟子を育てるときに行うことは、寝食をともにし、見本を示すだけであると言う。「道具を見てやり、研ぎ方を教え、こないやるんやというようなことは一切」せず、「『こないふうに削れるように研いでみなさい』とやって見せるだけ」であると言う。その理由は、「弟子になるものには大工になろうという気持ち」があるのだが、「ただその上に何か教えてもらおうという衣みたいなもので覆われて」おり、その衣を弟子が自分で解いていかなければ、大工の技術を習得することはできないからである。西岡によれば、大工が建物を建てる際には、丸暗記して覚えた気になっているような「頭のなかの知識」や記憶は役に立たず、実際に木を切ったり削ったりする技術が必要となるが、そのような技術を習得するためには、人から教えてもらおうというような考え方（「衣」）を自分で解き、師の見本を見ながら自分で考えてやってみることを繰り返し、手に記憶させていくことが重要なのである（79-82）。

西岡はまた、塔や堂を建築している現場での仕事の体験をとおして大工の技術を習得させていくことの重要性について述べている。「大工の仕事は最後は現場で覚える」ものなのである。「大きな、見たこともないような柱を削って、それを立てる。千を越える部材を一つ一つ仕上げていく。そして最後に素屋根をはずしたら、自分たちが造った建物がばーんと出てくる。これをやったんやな、という感激と一緒に、自分がやったことに失敗はなかったやるか、あそこが気になるけど大丈夫かいなという心配が吹き出してくるものなんです」と西岡は述べた後、「これは、そこらの木で練習していたんではわかりません」と言っている。西岡は、建物を建てるためには、大工は教わったことが現場でできなければならないし、また、自分の知らないことや

予想していないことに対処しなければならず、そのために、このような体験をさせ、それをとおして大工の技術を習得させる場として、現場が必要であると考えているのである（85-86）。

加えて西岡は、自らの体験をもとに、現場での経験をとおして初めてものごとの意味がわかることがあるという点について述べている。西岡は、祖父のもとで宮大工の修業を積み、それなりに仕事ができるようになっていたと思っていたが、「おじいさんがいった口伝の意味が本当にわかったのは法隆寺の金堂を解体修理していたとき」であったという。言葉として理解していた口伝の意味が現場での仕事をとおしてわかったという体験をした西岡は、現場での経験の重要性を強調している（86-87）。

②技術の進歩と失われる大工の力

西岡は、以上のように、宮大工の技術について、言葉では「教えようがない」ものであり、したがって、技術を習得するためには、木に触ったり匂いをかいだりして学んだり、見本を見て考えやってみることを繰り返し、手に記憶させていくことが大事であると述べている。そして、技術の進歩や効率を求める社会のあり方の中で、宮大工の技術や、木や道具への向き合い方などが変わってしまうことに危惧を感じている。便利さや早さを求める社会のあり方の中で、分業化や機械化などが進み、その結果、宮大工に必要と考えられてきた木を見抜く力、仕事への向き合い方が失われていくことを、西岡は、自分たちの使う手の道具と電気工具との違いなどに触れつつ指摘しているのである。

西岡によれば、「昔の宮大工とこれからの大工の一番の違い」は「木の選び方」である。「口伝」のひとつ（「堂塔建立の用材は木を買わず山を買え」）として伝えられてきたように、飛鳥建築や白鳳建築の場合には、棟梁が山に行き、木の癖や性質を見て木を選定した。分業化された現在は、この仕事は材木屋に任せられ、大工は寸法を指定して木を注文するだけであり、その性質を深く知ろうとすることもない。製材技術の進歩により、捻じれた木

でもまっすぐに挽いてしまうことができるので、一見よく見えるからであるという。しかし、それは、木の癖を隠して製材してしまうということであるため、現代では、木の性質を見極めるためにはよほどの力が求められると西岡は考えている（16-17）。

木の性質は製材段階で隠されても必ず後で出るため、それを見越して木を見わけなければならないが、それは難しいことである。そこで、そのような木の性格が出ないようにするために合板にしてしまい、「木の持つ性質、個性を消してしまった」と西岡は嘆いている。西岡にとって木のいのちを生かすということは、木の癖や性質を生かすことであり、癖を悪いものとしてではなく、使い方の問題として考えている。そして、「ほんとなら個性を見抜いて使ってやるほうが強いし長持ちするんですが、個性を大事にするより平均化してしまったほうが仕事はずっと早い。性格を見抜く力もいらん。そんな訓練もせんですむ」と、分業化の進んだ現代の矛盾を鋭く突いた発言をしている（17-18）。しかし、現代は人の感覚の訓練をさらに必要としない方向に進んできた。

また、西岡は、本来職人は早さが手柄であるため早さを競うところがあるが、機械化の進行にともなって、仕事を依頼する側がさらなる早さを要求するようになったことも、大工の木との関わりを変質させたと述べている。「今までは手の道具で早さを競っていたものが機械になり、その機械も早さを競ってどんどん進歩する」ため、そうした中で、木の性質はますます無視されてしまうことになるのである。いきおい大工の側も効率を上げるため、使いやすい木を求めるようになり、自分が使うことのできない曲がった木や捻れた木を悪い木、必要のない木として捨ててしまうと西岡は述べている。こうしたことが相まって、現代では、木を見抜く力自体が必要ではなくなってきており、そうした力を養うこともないのである（18-19）。

このように、現代社会は便利さや早さを求め、伝統建築の世界でも仕事の分業や機械化が進行し、大工の木を見抜く力が失われてきている。そして、木を見抜く力がないために木を合板にするなど、近代技術の発展が人間の感

性を衰退させるという悪循環が生じている。

さらに、そうした機械化の悪影響は、宮大工自身の作業においても生じている。西岡は、自分たちの使う手の道具と電気工具との違いについて述べている。西岡によれば、木を削るのに、現在、電気鉋を用いることが多いが、それは固い木も、柔らかい木も、捻れた木も同じように削ることができるという。しかも、話をしながらでも削れるという。一方、手斧は、自分の足ちような (ちよんな)の方に向けて刃を振るため、慎重に扱わなければならない上、力を入れなければ切れないという。「それもただ力まかせやなくて、チャツとためて、切ったら止めなあかん。ためる力がある」と西岡は言う（西岡、1988、29）。

「電気ガンナと手斧使うんでは、人間の気持ちが違う」と西岡は述べているが、電気鉋と手斧では仕事への身のはり方が違うのである（29）。

それは、「削る」という行為の質にも違いをもたらす。手斧の場合は刃でスカッ、スカッと削れるが、電気ガンナの場合は刃の回転により、木を削るのではなく木の繊維を千切っているのであり、それは切るということとは異なると西岡は述べている。それはまた、削られた木の質に関わっている。仕上げに槍鉋を使うと木が長持ちし、耐用年数に違いが出るのだと西岡は言う。電気鉋と槍鉋とで削った木を雨の中にさらすと、電気鉋の場合には1週間でカビが生えてくるが、槍鉋の場合には、水がスカッと切れてはじいてしまうという。電気鉋は回転で木の繊維を千切っているため、表面がげばだっており、水がしみこんでしまうのである（29-30）。

西岡は、手の道具と電気工具との違いをこのように述べた後、「電気の道具は消耗品や、わたしらの道具は肉体の一部ですわ。道具を物としては扱いませんわ」と付け加えている。さらに、先人たちの経験とともに道具があるということにも、西岡は注意を促している。「道具も自分だけの物やと考えるのは間違いです」と西岡は述べている。西岡は、道具の形ひとつについても、長い年月の中で使うのに最もふさわしいように決められてきたものであるととらえているのである。西岡によれば、昔の斧と最近の斧を比較すると、最近のものは昔からのものに形はよく似ているが、使いやすさが違うという。

昔の斧の形は、体験の積み重ねを経て使うのに一番よいように作られていたのだが、現在の人間は、昔からの道具に似た形のものを作れても、そうした時の蓄積がもたらすものを感じとることができないと西岡は述べている(30-32)。

また、宮大工の教えに「道具は得心がいくまで研げ」というものがあるが、西岡によれば、それは、「これ以上研げん」というところまで研ぐことを意味している。そうすれば、「頭で思ったことが手に伝わって道具が肉体の一部のようになるということ」である。西岡にとって、「道具は自分の肉体の先端」なのである(33)。また西岡は、別のところでも、同様に、「道具は大工の手の延長」であると述べている。そのようになるまで、道具は使いこまなければならないのである(西岡、1993、56)。

以上のことから、宮大工の仕事を支える道具について、西岡がどのようなとらえ方をしているのかを読みとることができる。木の癖や性質を無視して削ることが可能な電気鉋は、木のいのちを大事にできない道具であり、一方、手の道具である槍鉋は、それを使うことで木を長持ちさせることができる、つまり、木のいのちを生かすことが可能な道具であると考えているのである。また、西岡は、自分の肉体の一部として道具をとらえているが、木にいのちを感じるのと同様に、道具についてもいのちをもつものとみなしているように思われる。

なお、西岡は、道具の復元を行っている。槍鉋は「法隆寺の柱に残された刃物の跡のやさしさと肌合いのよさを作り出していた道具」と感じたからこそ、室町時代に姿を消してしまったそれを西岡は復元したのであった(64)。

3. 現代社会と「木」の哲学

2. において、西岡の木のとらえ方や木を扱う大工の技術などを、西岡の「木」の哲学としてみてきたが、その哲学には、冒頭で述べたような、今日のわたしたちの社会やくらしのあり方などを問い直す視点が含まれていると考えられる。そこで次に、西岡の「木」の哲学の意味を、現代社会のあり方

との関連で考察してみたい。

(1) いのちを生かす生き方

西岡の生涯は、木をぬきに語ることはできない。その木を西岡がどのようにとらえていたかのかを知ることは、西岡の仕事や生き方についての理解を深める上で欠かせないものであった。

西岡は、木を人間と同じ「生きもの」とみなし、「木も人も自然の分身」であるにとらえていた。そして、木がもつ「いのち」を生か^しき^るように木を生かしていくことが大工の役目であると考えていた。そのため、それぞれの木がもっている癖や性質を見抜き、うまく使っていくことが大事であると考えていた。

こうしたことから、西岡にとって、宮大工の仕事とは、木のいのちを生かす仕事であると考えていることができるであろう。「いのち」は、仕事を中心とする西岡の生き方とそこから生み出された「木」の哲学を語る上で、最も重要な視点であると考えられる。

木を生きものとしてとらえ、木のいのちを生かすという西岡の「いのち」観の根底には、「木も人も自然の分身」であるという見方が存在している。つまり、木も人間も自然界における同じいのちをもった存在であり、したがって両者は対等な関係であるという認識がみられる。また、両者のいのちはつながっているという見方を西岡はしている。

このような西岡の木のとらえ方は、人間と自然とを区別し、人間を優位に位置づける近代西洋の自然観とは異なるものである。

こうした「いのち」の視点はまた、今日の効率重視の社会やくらしのあり方を問い直す視点として不可欠なものだと思う。

西岡の木の哲学の根底にある「木のいのち」という視点は、より安価な木を次々と求めて大量に伐採していくような経済成長重視の大量消費型の社会のあり方や、自然を征服の対象とみなす自然観を問い直させるものなのである。

「いのち」という視点をもつことで、木の伐採は必要最小限におさえられるかもしれない。また、木のいのちを育てるために植林が促進され、伐採した木も最大限に生かす工夫が行われるかもしれない。木の文化をもつ日本においては、木を伐採することなしにはわたしたちのくらしは成り立たないであろう。したがって、伐採の量だけに目を向けるのではなく、木のいのちを生かすという視点を取り入れ、伐採する木への向き合い方や、伐採の仕方や、その後の木の生かし方を変えていくことが大事なのではないだろうか。そうすることによって、わたしたちは、木とのつながりを感じながら、またその「つながっている」というつながりの感覚の心地よさを感じながら、くらししていけるのである。このいのちのつながりの感覚こそが、世界が豊かであるという感覚の基盤をなすものであろう。

西岡の木のいのちをいかすという視点（「いのち」の視点）は、このように木と人間とのいのちのつながりを生み出し、両者の関係を対等なものにしていく可能性をもっていると考えられるが、このいのちを生かすという視点は、木との関係においてだけでなく、私たちのくらし全体を貫く視点として重視されるべきものであろう。

「いのちを生かす」ということがわたしたちの社会やくらしの中心に据えられるならば、西岡によって一本一本の木のいのちが生かされてきたように、わたしたち一人ひとりの個性が大事にされ伸ばされていくのではないだろうか。一人ひとり異なるものの見方や感じ方が尊重され、それぞれにとって心地よいと感じられるスピード（ペース）で生きることができるようになると思う。もちろん教育の場においても「いのち」の視点は欠かせないものである。西岡は、徒弟関係の中で弟子を厳しく育てたが、その根底には、木と同様に弟子のいのちを育てていくという姿勢があったと考えられる。

このように、西岡の木の哲学の中心である「いのち」という視点は、現代のわたしたちの生き方を問い直す重要な視点なのである。

(2) いのちを感じる感性—結びにかえて

これまで述べてきたように、西岡は、木を人間と同じ「生きもの」であり、いのちをもつものにとらえていた。だからこそ「この物いわぬ木とよう話し合って、命ある建物に変えてやるのが大工の仕事ですわ」といったように、「木と話し合う」とか、「そんなことをしたらヒノキが泣きよります」といった表現がなされたのである。

このような西岡の木に対する感覚、木のいのちを感じとる感性は、仕事をとおして養われてきたものと考えられるが、こうした感覚や感性は、自然や人とゆっくりと向き合うくらしから遠ざかっている現代のわたしたちの中からは、失われつつあるように思われる。

私たちのくらしのあり方全体を「いのちを生かす」という視点で貫いていくためにも、わたしたち一人ひとりが、西岡にみられるような「いのち」を感じる感性を養っていく必要があるであろう。「いのちを生かす」ということを知識としてもち、くらしの中に取り入れていくことも大事ではあるが、身体の深みの中から「いのち」が感じられるようになること、いいかえれば「いのち」に対して鋭敏な身体になることによってこそ、くらしのあり方全体を心地よいものに変えていく力となりえるのではないだろうか。そうしてこそ、人と人との関係や、人と自然との関係、さらには自分自身との関係（自分自身についての感じ方）が、よりおだやかで調和のとれたものとなっていくように思われる。

そして、そのようにいのちを感じられる感性をもてる身体になるために必要なのは、自らのくらしの中に、自然や人とゆったりと向き合う機会を増やしていくことではないだろうか。また、商品を購入し消費していくという消費中心のくらしのあり方を変えていくことではないだろうか。西岡が「いのち」という目に見えないものを感じとっていく感性を養えたのは、木という自然と向き合う仕事をとおしてであったからである。

引用文献

西岡常一（取材・構成 塩野米松）『木に学べー法隆寺・薬師寺の美ー』小学館、1988年

西岡常一（聞き書き 塩野米松）『木のいのち木のころ（天）』草思社、1993年、

西岡常一（監修 西岡常一棟梁の遺徳を語り継ぐ会）『宮大工棟梁・西岡常一「口伝」の重み』日本経済新聞社、2005年

*本文中の（ ）内は、著者、発行年、ページをあらわしている。